

「教会の戦い方」

サムエル記上

エペソ人への手紙

第17篇 41節～47節

第6章 10節～13節

説教 本庄 侑子 伝道師

今日お聞きしているダビデとゴリアテの戦闘シーンは、教会学校の子どもたちなら一度は聞いたことがある有名な物語です。しかし、8月は平和月間。日々、平和を求める祈りが重さを増す中でこのような戦闘シーンを耳にすると、結局、聖書の中でも勝ち負けを争っているのか、と聖書を閉じたくなるかもしれません。

聖書に記される戦いの物語において、心に留めておかななくてはならないことがあります。それは、神がお命じになる戦いはいつも、「主の戦い」(サムエル記上 第17章47節)であるということです。ダビデが呼び出されたのは、単なるゴリアテとの戦いでも、イスラエルとペリシテびととの戦いでもありませんでした。

「主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられない」(47節)主の戦いは、主が「救(すくい)」を施すための戦い。神が人を救うための戦いです。神は人を救うのに、つるぎとやりをお用いになりませんでした。それは後の時代、主イエス・キリストとして地上に姿をあらわすこととなります。主イエスご自身がつるぎとやりを用いることなく、むしろそれらに差し貫かれて、たったお一人で戦い抜かれました。

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」(エペソ人への手紙 第6章12節)かつてダビデが戦った「主の戦い」、後に主イエスご自身が戦い抜いてくださった戦いは、「わたしたち」教会の戦いです。それは「血肉に対する」戦いではありません。戦うべき相手は、悪を行う人間ではないのです。人間に悪を行わせる「悪の霊」との戦いであり、罪との戦いです。私たちを神から引き離し、私たち同士で争わせる、罪そのものを取り除く戦いです。

ダビデの戦いが、単純にゴリアテという人間との戦いだったのなら、確かに武力が必要だったのでしょう。しかし、主の戦いが罪との戦いであるならば、つるぎややりは何の力も持たないのです。どれだけ相手をつるぎのような言葉で打ちのめし、急所をえぐり、武力で打ち倒しても、罪を取り除くことはできないからです。神は、罪を取り除く唯一の方法をお示しくされました。それは、ただ愛による、それも神の

愛による、ということ。

世界の歴史の中で罪を取り除くことができたのは、神の身分を捨て、人としてお生まれになり、十字架の上でもだえ苦み、罪による滅びを全て引き受けて死に、3日目に甦えられた、神の愛のみでした。洗礼を受け、キリストのものとして生き始めた者たち、教会はみな、この神の愛を受けて古い自分に死に、神の愛に結びつけられた仕方、新しく立ち上がらせていただいたのです。人間相手の戦いを繰り返すことしかできなかった私たちは救い出され、主の戦い、罪との戦いへと新たに呼び出されたのです。

先週、夏期聖書学校が行われました。始まる前、子どもたちは打ち解け合えるだろうか、と先生たちと心配していました。しかし、良い羊飼イエス様の言葉に耳を傾けた2日間の中で、子どもたちはあっという間にお互いに目を向け合い、助け合う関係を築いていきました。羊飼いの愛の力は、仲違いさせようとする「悪魔の策略」(エペソ人への手紙 第6章11節)などものともしないことを目の当たりにさせられました。

「わたしはこれらのものを着けていくことはできません。慣れていないからです。」(サムエル記上 第17章39節)ダビデはつるぎややり、よろいやかぶとに違和感を感じ、それらを脱ぎ捨て、いつもの羊飼いの姿で出て行きました。私たちにも同じことが起こっています。この礼拝がそうです。神は、主の日ごとに、慣れない道具で人間相手に戦ってボロボロになって帰ってくる私たちに気づかせてくださいます。

よろいやかぶとはあなたには必要ない。つるぎもやりも似つかわしくない。もうこれ以上、互いに傷つけ合わなくていい。あなたは私の愛する子。あなたには私がいる。私の愛を受けなさい。私の愛の中で生きなさい。

「またこの全会衆も、主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであって、主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである。」(47節)世界も知ることとなります。本当に戦うべきは罪であり、もはや、私たちにはつるぎもやりも必要ないということ。神の愛が私たちを救うのだということ。

(記 本庄侑子)